

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語試験 日 本 語

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけない。

成	
績	

2022年度

大学院文学研究科博士課程前期2年の課程入学試験

(春期・一般選抜) 問題

外国語試験 (日 本 語)

一、次の文章を読み、後の問に答えよ。

ケアはたしかに相互行為だが、ケア関係には絶対的な非対称性がある。ケアする側はケア関係から立ち去ることができ、ケアされる側はケアへの依存から脱することができない。ケアは「ニーズ (needs)」、すなわち、必要を持った当事者なしには存在しないから、ニーズに応えない、あるいはニーズと食い違ったケアは、たんに無駄であるばかりか、しばしばネグレクトや虐待にもなる。しかも専門家のパターナリズムに対して、当事者の声はこれまで驚くほど聞かれてこなかった。だからこそ中西・上野〔2003〕は社会的弱者の「当事者主権」を強調したのだし、ケア研究のなかでの「当事者研究」の重要性は、いくら強調しても足りない〔浦河べてるの家 2005; 石原 2013〕。当事者研究の登場は、学問の「中立性・客観性」の公準を (ア) ころがす、サイエンスへの挑戦でもあった。わたしがケアサイエンスに対して持つ疑念は、ここからも来ている。

ケアサイエンスの概念が、看護学の専門家たちによつて (イ) 提起されたことには、①興味深い背景がある。人口構成が変化し、超高齢化によつて死の臨床像が大きく変化した。治らない慢性病や加齢にともなうがんのような疾患によつて死すべき立場に立たされた高齢者たちを、「治療」という概念から離れて「介護」することが必要になったからだ。2000年代の介護保険の施行以来、「介護」という概念を含む、「介助」「育児」「世話」などを包含した上位概念としての「ケア」は、研究主題として (i) にわかに脚光をあびるようになった。そこには「キユア (cure)」と「ケア (care)」を区別することで、医学から看護学を差別化しようとする意図が働いていたことだろう。

(ii) 皮肉なことに、介護保険そのものが、医療保険の財政破綻を糊塗するために、医療から介護を切り離す政策意図のもとに成立したものだった。介護保険は当初から「在宅支援」を意図していたが、そこに在宅看取りが加わると、訪問医療と訪問看護がいちやく脚光をあびるようになった。「地域包括ケア」の名のもとに行政の (iii) タテワリの壁が阻んできた医療と介護の一体的な連携がようやく政策課題になってきた。

訪問看護は、長きにわたつて医師法の制約下で、「医師の指示のもとで」と医師との絶対的なヒエラルキーのなかにあった看護職にとつて、医師から自立する千載一遇のチャンスだったといえる。医療機関に所属しない独立の訪問看護事業所が増え、一部は経営的にも採算ベースに乗るようになった。医師との対等な関係が (ウ) 悲願であった看護職にとつては、「医師にできないしこと」としての「ケア」は、看護職にとつてのアイデンティティの核心を占めると言ってもよい。

だが、ここにも盲点はある。ケアを専門職にする人びと、すなわちケア・ワーカーとは、一般に介護職のことを言う。「医師にはできなくて、看護師にしかできないしこと」はたしかに「ケア」だが、その背後に、さらにケアを専門にする介護職がいるとしたら、看護職と介護職を差別化するものは何だろうか？ そしてもし両者を差別化するものがないとしたら、看護職と介護職との処遇の格差は、何によつて正当化されるだろうか？

在宅看取りの経験の蓄積にしたがつて、看護師のなかには、「看取りには医者はいらない、看護職だけでじゅうぶんできる」と断言する人たちが増えてきた。他方、同様に施設看取りやホームホスピスでの看取りの経験の

(エ) 蓄積にともなつて、介護職のなかにも「看取りに医者も看護師もいらない、介護職だけでじゅうぶんお看取りできます」と断言する人びとも出てきた。看護は今や医療と介護のはざまに立たされている。わたしが介護としてのケアを強調するのは、ケアサイエンスが、看護職を介護職と差別化するためのツールになるとしたら逆効果だからである。

ケアの現場には今や、医療、看護、介護だけでなく、理学療法士、歯科医、歯科衛生士、言語聴覚士、薬剤師、心理療法士、ソーシャルワーカーなど多職種専門家の連携が必要なことは知られている。本来なら医師にもまた、ヒエラルキーのトップではなく、チームケアの一員 (one of them) としてのふるまいを求められるべきだろう。オランダのビュートゾルフ (community care の意) の実践に見られるように、看護と介護の相互乗り入れ的な協働こそが、ケアの受け手にとつてもっとも満足度が高いのだから。ケア研究はこういうケアの現場の、

多元的・領域横断的アプローチをこそ目指すべきだろう。

最後に、ケア研究の持つ文明史的な意義についても触れておきたい。②ケアは近代リベラリズムの「自立・自律」した個人という人間観に対する最大の挑戦である。③「自立の神話」は、「依存の忘却」によって成立していると喝破したのは岡野八代〔2012〕である。安全保障 (security) とは、ラテン語の se-curo (ケアのない状態) すなわち憂慮や不安のない状態から来ているが、その逆、「ケアのある状態」においては、ケアとは非暴力を学ぶ実践である。(オ) 圧倒的に非対称な権力関係のもとで相手の生殺与奪の権を握りながら、その権力の行使を抑制しつづけることをケアは要請する。

(上野千鶴子「ケアサイエンスとは何か? — 当事者研究の視点から」公益財団法人 日本学術協力財団『学術の動向 22-5』による。76～78頁)

問一 傍線部 (ア) ～ (オ) について、カタカナは漢字に、漢字は読み仮名を付けよ。

(ア)

(イ)

(ウ)

(エ)

(オ)

問二 文中の語句 (i) にわかに、(ii) 皮肉、(iii) タテワリの語の意味を説明せよ。

(i)

(ii)

(iii)

問三 傍線部①「興味深い背景」とはどのようなことが、本文の内容に即して説明せよ。

問四 傍線部②「ケアは近代リベラリズムの「自立・自律」した個人という人間観に対する最大の挑戦」とはどのようなことか、本文の内容に即して説明せよ。

問五 傍線部③「自立の神話」という表現について、なぜ筆者は「神話」という用語を用いたと考えられるか、本文を踏まえて説明せよ。

二、問一～二に答えよ。

問一 次の文中の空欄 (①) ～ (⑩) に当てはまる平仮名一文字を入れよ。答えは文中の () 内に直接記入せよ。

言葉にとっての秩序の骨子となるのは、文法だ。しかし、文法という言葉 (①)) 良いイメージを持っている人は少ないのではないだろうか。「学校での語学の授業は、文法ばかり (②)) 実践的ではない」とか、「文法 (③)) めっちゃめっちゃでも、通じるときは通じる」とか、「文法なんて結局、格式張った書き言葉のためもの (④)) しかない」といった意見もたま (⑤)) 耳にする。私も学生時代に英語や国語の文法の勉強を面倒だと思っていた人間なので、その気持ちはよく分かる。しかし、理論言語学を学ぶようになってから、文法の重要性を強く認識するようになった。

私たちは、単語を組み合わせて句や文を作り、それを口に出すことで他人 (⑥)) コミュニケーションを取っている。単語の数には限りがあるが、私たちはそれらを組み合わせることで実に多く (⑦)) ことを表現できる。言葉によつて、誰も見たことのない状況 (⑧)) 、誰も思いつかなかった考えまで表現できるのは、そういった組み合わせのおかげだ。そして文法とは、理論言語学においては、私たちが単語を組み合わせて句や文を作るときに使っている知識のことを言う。

母語の文法は私たちの頭の中に潜んでいて、ほとんど意識 (⑨)) 上ることはない。しかし、私たちが何らかの文を耳にして「なんか変だな」「不自然な文だな」と感じるとき、そこにはたいてい文法の知識が働いている。理論言語学においても、私たちの頭の中の文法がどうなっているのかを探るとき、「どこかおかしい文」 (⑩)) 手がかりにすることが多い。

(川添愛『ふだん使いの言語学「ことばの基礎力」を鍛えるヒント』〈新潮選書〉による。55頁)

問二 次の文中の空欄 (①) ～ (⑩) に当てはまる日本語表現を直接記入せよ。

私は子どもの母語の習得の過程とメカニズムを (①) ので、このことが特に気になるのかもしれない。日本の子どもが「日本語ができるようになる」というのは何がどうできるようになったときなのだろうか？

2、3歳でも簡単なコミュニケーションはとれる。文法もそんなに (②) 。発音は、たとえばサ行やラ行の音がうまく言えなくて「らいおん」を「だいおん」と言ったりするものの、それ以外は、立派な「ネイティブの発音」だ。つまり2、3歳の幼児は十分に「日本語ができる」のである。5歳くらいになれば発音もイントネーションも日本語母語話者としてほぼ完璧になる。語彙もたくさん身につけていて、大人が (③) ことはほぼ理解でき、受け答えができる。しかし、たいていの5歳児の語彙は日常会話のレベルに限られていて、抽象的な概念のことは (④) ので、深い内容の話はできない。5歳児の日本語力があれば「日本語ができる」といえるだろうか？

高校生、大学生の日本語はどうだろう。文法は、ほぼ間違えない。彼らの「てにをは」の使いかたは違和感がない。しかし、たとえば敬語の使いかたが (⑤) ことも多い。「先生は明日何時に大学に参られますか？」などと言われて、ちよつとびつくりしてしまう。レポートを書かせると、話しことばと書きことばが (⑥) ていて、いわゆる「レポートとしての文章」の体裁をなしていない日本語を書いている学生がいる。一方、SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の文脈では「完璧な (適切な) 日本語」を (⑦) 。彼らの日本語のレベルはどうなのだろうか？

「英語ができるようになりたい」と言うなら、英語を母語とする5歳児のレベルなのか、会話やSNSは完璧だがレポートはきちんと (⑧) 学生レベルなのか、それ以上のレベルなのかを、まず考えたほうがよいだろう。すべての技能において、プロとなつて、その道を (⑨) 場合と、趣味で楽しみたいときでは、かける時間も勉強や練習のしかたもまるで違う。英語もどのレベルを (⑩) によって、学びかた、時間の使いかたが大きく違うのは当然だ。

(今井むつみ『英語独習法』(岩波新書)による。10～11頁)

三、次の文章を読んで、全体の要旨を二〇〇字以内で記せ。

自然が芸術を生むと考えるのが常識であるように、文学においても、一般には先行するものほど権威があるように考えられて、原稿至上主義が生れる。作者の原稿とおりのテキストがもつとも正しいものとなる。あとあとになって、原稿から離れる本文があらわれると、その逸脱の度合に比例して乱れの大きい、価値の低いものと扱われる。先行テキストは後続のものを規制するが、逆に後続の異本が先行する形式に影響を及ぼすことはありえないように考えている。

ところが、実際には、このありえないはずのことが、ときどきは起っている。もとのテキストに異本が逆影響を及ぼすことがすくなくない。たとえば、演劇において、上演にあたって新工夫が加わり、それが観客に受けると、つぎからは、それが正統的なものと考えられるようになる。こういうことがくりかえざれていると、原形は消滅していつしか異形が典型となり、原形以上に大きな権威をもつようになる。

異本は原形の乱れたものではなくて、典型を生み出すために欠かすことのできない胎動ということになる。原形がただちに典型となるのではなく、異本を経てはじめて典型があらわれる。典型は、解釈、あるいは、誤解、あるいは、変形の収斂したもので、したがって、原形と完全に重なり合うことはまずないと言ってよい。

一般に表現のテキストははじめは単一である。同時に複数の本文のできるわけがない。しかし、すぐれた価値をもつものなら、やがて異本が生じるのも必然的である。これが原本と比べてすぐれているが、劣っているかは場合によって定まることで、一概にはきめられない。

実際は、すぐれたものと感じられる異本があらわれると、これは典型に通じるものとして肯定される。そして、原形に逆作用してそれを変形しようとする。もし、それが困難ならば解釈の枠を変えようとするであろう。芸術が自然に向って美しくあることを教えるのに似ている。

異本にはもっと激しい機能が秘められているように思われる。異本が先行して、原形を変えようとする一環として、原形がいちじるしく異本と抵觸するときは、異本はあえてこれを抹殺することすら辞さない。印刷されたものは物理的に完全に消滅させるのは困難なために、このことがはつきりしないけれども、口語文芸の世界では、有力な異本はつねに原形を排除しようとして、実際にそれを抹消してしまっていることが多い。原形がなくなれば、異本が新しい原形である。これをくり返していて、ついに典型になる。一度典型となったものに対しては後続の異本はなすところがすくない。

こうした本末転倒と考えられることは、原本と異本の間にだけ起っているのではない。言葉について、名詞が基本で形容詞はそれに派生語尾をつけてつくるように考えられている。名詞が先にあって、それから形容詞があらわれるのだとされる。ところが、そうとは限り限らないのである。各語の初出年代をはっきりさせているイギリスの『オックスフォード英語辞典』によると、形容詞の方がさきにあらわれ、それに相当する名詞はそのあとから生れている例がいくつも発見される。

たとえば、「有史以前」(prehistoric)という形容詞は一八五一年の初出だが、名詞形 (prehistory) は一十年後の一八七一年でないと英語として登録されない。つまり、存在しなかったのである。「古典(主義)的」(classic)の初出は一七四四年だが、名詞の「古典主義」(classicism)の初出は一八三〇年である。

